



# 林業知識

## ★ 林業金融

農林漁業金融公庫の融資制度の抜本的改善で林業関係についても、金利の大幅引下げ、償還期限の延長、又資金量の拡

### 林地肥培で

#### 伐期短縮へ

(阿蘇郡小国町)

親爺が植えた木を、孫の代に伐るといふ考えから、自分が植えた木を自分の代に伐るといふ近代的な考えに移行しつつある。いわゆる早期育成林業という面から、肥培管理の方法は一つの新しい道だといえよう。ひとところ栽培林業という言葉が流行したように、林業は林業の経済性を再認識させていることは確かである。阿蘇の小国地方でも昨年より肥培管理が活潑になり、伐期の十年短縮をめざして県の指導員を中心に計画的に行なわれている。植林して二年目から一畝あた

すくすく伸びる若い施肥林



り二十時、固形肥料を全面散布しているが、効果は目立って、特に成長の鈍い地帯では驚くほど伸びを示している。木の年輪にしても今まで小さかったのが肥培した結果、等間隔にキレイになったことがわかり、肥培管理の利点がいふんな形で現われはじめているようだ。(K)

## 林業金融

## 造林補助金の手続きを

する世帯の農林水産所得が原則として

区分	貸付対象事業	利率	償還期限	貸付金額の限度
林業改善資金	取得資金	3.5%	25年以内 一時償還	80万円
	育林資金	5%	20年以内	80万円
林業経営維持資金	相続資金	5%	30年以内	30万円
	医療資金	5%	〃	30万円
	負債整理資金	5%	〃	30万円

## ★ 造林補助金の

### 手続きを

森林資源の造成と国土保安をはかるために、造林した者に対し、県は年々多額の補助金を交付している。本年交付された補助金額は、約一億七千万円。交付申請の手続は森林組合や市町村の係に依頼すればいい。

## 一般造林

区分	提出期限	備考
前期造林(自四月三十日造林)	一月十五日(至六月三十日造林)まで 市町村長(至七月三十一日造林)に提出	1補助対象樹種あかしや、はんのぎ、いたちはぎ、やまもも、まつ、の各額は五二、九〇七円であった。 3その他一般造林と同じ
後期造林(自十月一日造林)	七月三十一日まで知事に提出	
造林予定書	一月十五日(至六月三十日造林)まで 市町村長(至七月三十一日造林)に提出	
造林補助金交付申請書	九月十日(至十月三十一日造林)まで 市町村長に提出	
事業設計書	九月三十日まで知事に提出	
補助金交付申請書	三月三十一日まで知事に提出	

## ★ 松くい虫の防除

松くい虫が熊本県に発生したのは昭和十二、三年頃。終戦前後から集団的に発生するようになり急激に被害が多くなってきた。

現在までの防除方法は被害木を伐倒し剥皮焼却する方法で、完全に実施すれば原始的方法ではあるが確実な方法である。しかし現在のような努力不足の時には完全に実施することは困難であるので薬剤による駆除方法が研究され現在実用化されている。T一七・五、パークサイド等がある。

松くい虫の防除は被害木の駆除だけでは完全ではないので近年予防方面の研究が行なわれている。熊本県では①健全木

## ★ ニジのバランス

「世の中はもちつもたれつ」といふことばがあるが、これは動物、植物おしなべて生物間における大原則である。これは実際の事で現在も続いているがアメリカの五大湖の一つスペリオールの西岸にロ

ヤールという小島がある。この島には「ヘラジカ」という馬程もある大きいシカが居たがこの島がヘラジカ保護のため国立公園に指定されてからこのシカが激増し一時は三千頭にも達した。するとその食物であるカバヤドグウッドやバルサムの木が次第に減少し食物が不足するようになった。

たまたま一九四〇年頃極寒で湖面が氷結した時数匹のオオカミが対岸のカナダから渡ってきた、するとオオカミは非常に勢が増えヘラジカは喰い殺されて六百頭に減少した。この位に減少するとオオカミは餌を得ることが容易でないので繁殖力が減じて増えなくなり一方ヘラジカの減少も止ると同時にヘラジカの餌であるいろいろな木も生気をとりもどして青く茂るようになりここにオオカミ、ヘラジカ、樹木の間にはバランスがとれてこの島はヘラジカ保護のため安定した国立公園になったという。このように自然界は

永い間に動物、植物含めて持ちつ持たれつこのバランスがとれて居るのだが、現在のように文明が進んでくると山林の伐採等でこのバランスがくずれてくる。例えば、雑木林を切りはらって松だけを植えると鳥が住めなくなるだけでなく、今迄居た虫も居なくなり松だけが栄えようとする。つまりバランスがくずれたのである。そこで自然はバランスを回復するために松を枯らそうとして松くい虫等の害虫を増やす。つまり害虫の大発生であ

る。松くい虫は自然にとってはバランスを回復する手段にすぎないのである。しかし害虫が増えすぎて松が枯れば第二のバランスがくずれる。そこで自然は虫をおさえるために天敵である食虫鳥や寄生虫などをふやす必要にせまられるのだが人々はやもすると鳥など天敵の増加をさまたげる。そこで害虫はなかなか減らない、若し人間がこのよう有益鳥類等の増加を手つだつてやるなら害虫はすみやかにさまたげられる。人間は造林しても田畑の耕作をしても常に自然のバランスを壊しているわけである。

そこでバランスをとりもどすために自然は害虫を増すのは当然なことである、それならば人間はどうすればよいかといえは造林や田畑のまま新しいバランスを作ればよい、それはどういふ事かといえは害虫を食う益鳥等の増加を手つだつてやればよい。春から夏にかけて野や山の鳥は産卵期に入り、美しい歌声とともにたくさんの害虫をとって人間社会に貢献する。現在のような工業文明の発達する中でやもすると荒廃しようとする人類社会環境を可愛い野鳥の増加によって美化し、併せて人間の生活にうるおいをもたらすようにしたいものである。(林務部)